

| | |
|--------------|---|
| Title | 日原さんを追憶する |
| Author(s) | 黒川, 洋一 |
| Citation | 中国研究集刊. 1985, 2, p. 56-58 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/61213 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日原さんを追憶する

黒川洋一

日原さんの容体が思わしくないということを耳にし、研究室の斎木・金藤両君の案内で、はじめて病院に見舞ったのは、亡くなるほんの四日ほど前の日曜日、六月十七日のことであった。

「そのうちに元気になるさ」といった気軽な気持でお見舞いに出かけたのだった。というのは、加地さんの発案で、長岡天神の錦水亭において、日原さんとしゅんの竹の子料理に舌づつみを打ちながら、のどかな春の一日を過ごしたのが、ほんの二、三か月ほど前のことであつたからである。その日、日原さんと四条河原町で落ち合つて一緒に錦水亭まで赴き、帰りはまた長岡天神駅前のコーヒー店で雑談に打ち興じたのだったが、いつもと変わった様子はなにひとつ感じなかつた。このたびの入院も、阪大から京大に移つた気づかれからだろうぐらいに思つていたのであつた。そんな気持でのお見舞いであつたが、病室に入るや、「あつ、これはいけないな」と直覚するほど、日原さん

はひどくやつれてベッドに横たわつていた。わたしたちがやつて来たことを知つた日原さんは、わたしがおしとどめるのをもきかず、自らからだを起こして、一年ほど前からからだの不調を覚えていたのに、忙しさに追われて医者に診てもらふ余裕のなかつたことや、最近の病状の経過などについて話すとともに、談は前から約束していた宇佐美一博さんの拳式に行けなかつたということに及び、わたしのそのときのスピーチが聞きたかつたのに残念だつたといつたようないつもの雑談を交わしたのであつた。別れ際にはベッドに身を横たえたまま、なんどもなんども手をかすかに振つて別れを惜しまれるのだった。それが日原さんを見た最後であつた。

わたしが、日原さんを初めて知つたのは、わたしが大阪大学に赴任してきた昭和四十七年のことである。京都大学はほぼ同じころの卒業であることから考えれば、重沢先生や吉川先生の

講義には同席していたはずであるが、そのころわたしは日原さんの存在には気が付いていなかった。また、大学を卒業してからも、わたし自身が学会には入らず、学界の外にあってひとりで本を読んでいたこともあり、付き合いはまったく無かったわけである。わたしが阪大に移って来たころは、学園紛争のさなかであり、わたしは毎日のように警備に駆り出され、いつもいらいしながら時間を過ごしていたが、日原さんに出会ったのも、四月のはじめ、警備に立っていた教養部ロ号館と文学部とのあいだの中庭においてであった。わたしは日原さんを知らなかったが、日原さんはわたしを知っていたものと見え、初見の挨拶は日原さんからであった。そのときなにを話したかは記憶にない。しかし日原さんは夜の警備を別に苦にするふうもなく、微笑をたたえて悠然として星のまたたきはじめて夕空を眺めていた姿が妙にわたしの記憶に残っている。

以来、十年間、日原さんとわたしは、大変深い関係を持ち続けることになったのだ。ことあるごとに日原さんとわたしは行動をともにしたといつてよい。大学に出てくる日には、たいてい中国哲学研究室に座りこんで、学生諸君のいれてくれたコーヒーをすすりながら、日原さんと雑談することを楽しみにしていたが、談話は多くわたしの一方的な議論に終わるのがつねであった。わたしの議論の中心は、従来の中国哲学史が古代と近世に厚くして、その中間の中世に冷淡であることに對する不満であった。およそ生命のあるところにはかならず哲学があ

るはずである。従来、わたしたちが詩人として扱ってきた阮籍、陶淵明、謝靈運、沈約、李白、杜甫、韓愈、柳宗元、白居易、李商隱らは、実は哲学者なのではないか。かれらはおのれの哲学を、詩の形をとって表現したまでであり、かれらの詩の中からその哲学を引き出し、ひとつの論理に組み立てる試みをなぜ従来 of 哲学研究は行なつてこなかったのか、というのがわたしの議論であった。

わたしの議論はいつも一人角力に終わり、日原さんの考えを聞いたことは一度も無かつたといつてよいが、どうもわたしは釈尊の掌の上を駆け回っていた孫悟空のような存在であつたやうな気がしてくる。日原さんを相手に自分の考えを述べているうちに、わたしの関心はいつの間にか文学から哲学のほうに移ってしまったようである。哲学の研究法を身につけていない素人の悲しさで、どのようにして詩人たちの作品の中から、その哲学を抽出してひとつの体系に組み立てて、それを思想史のなかに位置づけてゆけばよいのか、いまだに暗中模索の状態にあるといつてよい。かろうじて書いた論文が、広島大学の古田教授の停年退官を記念する論文集の中の「杜甫『詠懷古跡五首』について」と、角川書店から間もなく本になるはずの拙著『杜甫』の中の「中国思想史上における杜甫の位置」の二篇にすぎない。韓愈や、白居易はまだ混沌としたカオスのなかに漂っているというのが実状である。わたしの仕事が形を整えないままに、日原さんがあの世に行ってしまったことを、わたしはいつも残念

に思わずにはおれないのである。日原さんはわたしと議論するたびに、「早く中世哲学史を書いて下さいよ」というのが口ぐせであり、「もうちょっと待って下さい」というのがまたわたし

しの口ぐせであったが、日原さんは今でもわたしのすぐ近くにいて、ここにこしなから、「早く読ませて下さいよ」と語りかけているように思われるのである。

四月二日